

Plan Do See

「さりげないしぐさから思うこと」

あさひ野小学校 校長 金山 住恵

朝、登校する子供たちを校門で出迎えていると、長い道のりを歩いてきて疲れている弟の背中を軽く押しながら歩いてくる姿や、高学年の女の子がさりげなく1年生の重い荷物をかわりにもって登校している姿を見かけることがあります、大変心が和みます。

そして、その光景から、「さしのべしぐさ」という言葉が浮かびます。これは、「江戸しぐさ」の一つです。困っている人がいたら、相手の立場をよく考えて、必要なところだけをさりげなく手を差し伸べるしぐさです。

「江戸しぐさ」は、江戸時代、皆が心地よく暮らしていけるように、当時の人々が編み出した生活術です。江戸の人々は、お天道様にはずかしくないように行動することや、人のおかげで物事が成り立っているという考えを通して、真心をもって人間関係を大切にしようとしていました。「相手を気づかう心や行動」は、現代にも通じる不易の教えであるといえます。他にも次のような教えがあります。



傘かしげ …狭い路地を傘をさした者同士が行き会った場合、傘のしずくがかからないように、互いに外側に傾けながらすれ違うこと

肩引き …狭い道で人が行きかう時、ぶつからないように肩を引いてすれ違うこと

七三歩き …歩いている道の七は空けておき、自分は三の幅で歩くこと

こぶしうかし …乗り合い船等で後から来る人のためにこぶし1つ分浮かせて席をつくること



「江戸しぐさ」の教えから、「思い」は見えないけれど「思いやり」は目に見えること、「心」は見えないけれど、「心づかい」は目に見えること、そして、しぐさを通し、気持ちを伝え合うことができることを学ぶことができます。現代の子供たちは、少子高齢化社会や情報化社会の中で、取り巻く環境が大きく変化しており、他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ち、人間関係を形成する力の低下等が危惧されています。人間関係の基本は、他者に心を開いて、互いに思いやり、共に生きようとする気持ちをもつことです。今回の学習指導要領改訂においても、人間関係を築く力の育成や、子供たちの内面に根ざした道徳性の育成が重要視されているのは、そのためだと思います。

教室から出る人が先、廊下の七三歩き等、互いを思いやる「朝日っ子しぐさ」というものを児童会や生徒会で話し合い、改めて思いやりについて考えてみるのもよいのではと思います。子供たちは、これからますます情報化の進む国際社会に中で生きていきます。

「相手を気づかう心や行動」を大切に、成長していったほしいと切に願っています。

ともにがんばりましょう～今年度朝日町の学校に赴任されたみなさん～

「英語教師になって」

朝日中学校 橘 紀子

英語教師になって15年になりました。教え子が海外で英語を使って活躍していたり、英語教員を目指していたりするのを聞いて、とても嬉しく思います。教育実習にも担任した生徒が何人も来てくれます。教職に憧れをもってくれたことを誇りに思います。

初めて赴任した学校で、「教師も得手不得手があるのだから、自分の長所を生かし、力を合わせて生徒のために頑張ろう。」と、校長先生に励まされたのを今でも覚えています。私は、生徒のために何ができるか考え、私の大好きな英語を手を抜かずに一生懸命に教えようと努めてきました。授業の最初には、大好きな英語の歌を生徒と一緒に歌います。町で教え子に会うと、「先生の授業で英語の歌を歌ったのが楽しかった。」と言ってくれます。

最近では、以前から理想としていたICTを用いての授業に挑戦しています。英語の文法を少しでも分かりやすく教えたいという思いからです。今までは、1枚ずつ印刷していた写真や絵もコンピュータを用いることで簡単に生徒に提示できます。私が教員になった頃とは、大きく教え方が変化してきました。

最近では、育児との両立が大変で、思うように仕事ができないこともあります。しかし、学年の先生方がいつも私の話を聞いてくださったり、陰でサポートしてくださったりするおかげで、何とか頑張ることができます。いつも笑顔で元気いっぱいの学級の生徒たちにも癒されています。

教師になって15年。大切な生徒たち、保護者の方々、先生方に支えられていることに感謝の気持ちを忘れず、中堅教員としてさらに成長していきたいです。



「朝日町に着任して」

さみさと小学校 高島 清賢

この町で生まれ、小学校、中学校、高校時代を過ごした「ふるさと」朝日町で働かせていただき半年が過ぎました。また、これまで他の市町村で勤務していたためか、母校に勤務しているにも関わらず、新鮮な気持ちで働かせていただいています。

まず感じたことは、教育用コンピュータやタブレット等の情報教育機器が大変充実していることです。デジタル教科書対応のプロジェクターも整備されており、積極的に活用することで、子供の視覚や聴覚に訴え、効果的に授業が進んでいくのではないかと思います。私自身は、デジタル機器が苦手なのですが、この充実した教育環境を十分生かさなければならないと感じています。

今年度は、特別支援学級の担任をしています。特別支援学級の子供たちは、素直で優しい心をもっています。友達とトラブルを起こした際には、自分のしたことや言ったことを素直に話してくれます。その後、友達にどのように接すればよかったのかを一緒に考えています。また、学習では、できるようになったことや改善したことを積極的に褒めるようにしています。それらの支援で素直で優しい心を伸ばしていければと思います。

授業や学校生活を通して、子供たちの成長を共に喜び、支援を続けていきたいです。



「運動会の思い出」

さみさと小学校 浦田 佳子

運動会が終わりました。2学期になって、初日から2週間余りの練習期間を過ごし、子供たちは今年も見事に成長していました。

初めのうちは恥ずかしがっていた応援においても、観客の前での本番の後は、日焼けした顔と声の擦れが誇らしげで、運動会が楽しくてしょうがない顔で私たちに笑いかけしてくれました。子供たちは、運動会のスローガンにあるような「全力・協力・真剣勝負！光り輝くさみっ子 2017」を体現するように毎日成長してくれました。



私の子供の頃は、稲刈りがすっかり終わった頃で、田んぼには刈り取った稲の穂が丈を短くし、コスモスが絡まるように咲き誇っていました。空気はきりっと引き締め、空は高く澄んでいました。家族が持ってきた弁当には、梨やみかんが並び、香りを嗅ぐとその団欒が蘇ります。あの頃は、たいして意識もせず過ごしたその日も、匂いや空気感はしっかり体に染みついていたということです。

あっという間に過ぎていく日々ですが、やがては子供たちも同じように思い出すごでしよう。一つ一つの行事、授業中の会話、毎日を大切に全力で過ごすことを心にしかと留め、頑張っていきます。

「朝日中学校に勤務して」

朝日中学校 野坂 真由美

「遠い」。これは、私が朝日中学校に勤務することが決まったときに、最初に思ったことです。そう思っていたときに一緒に勤務していた先生から、「東京に一番近い町だぞ。」と冗談っぽく言われ、単純に「そうだ！」と思うと朝日中学校はどんなところなのだろうと楽しみになりました。

朝日中学校の第一印象は「挨拶ができる学校」でした。初めて出勤した日は春休み中でしたが、会う生徒たちは大きな声で「こんにちは」と挨拶してくれました。挨拶は、できて当たり前なのかもしれませんが、ほとんどの生徒が挨拶を当たり前のようにできることに驚きました。家でも家族と「おはよう」「おやすみ」などの挨拶をしっかりとしているからできるのだと思いました。

また、先日学校の敷地内にサルが来ました。畑を荒らすサルでしたが、普段目にすることがないサルを学校の敷地内で見たことに感動しました。道徳の教科書に、「動物園でサルを見てもたいして感動しないが、こうした自然の中で見ると、胸がドキドキするほど、感動するものである。」という一文があったのを思い出し、共感しました。

毎日、自宅と学校の往復ですが、朝日中学校に近づいてくると、遠くに見えていた山がだんだん近くに見えてきて、今日も一日が始まるぞという気持ちになります。



朝日中学校は、とても居心地がいい学校です。朝日中学校に勤務できて良かったなと思います。

「教師 1 年目の感想」

朝日中学校 舟根 慎

今年の3月に大学を卒業し、中学校で働き始めてから約半年が経ちました。毎日が新しいことの発見の連続で、あっという間の半年間だったように思います。

この半年間を振り返って、まず一番に思うことは、「朝日中学校に来ることができてよかった。」ということです。朝日中学校に赴任することが決まった3月末は不安でいっぱいでした。しかし、実際に生徒たちと触れ合って、その不安は無くなっていきました。廊下や授業での元気な挨拶の声、学習に熱心に取り組む姿。一つ一つが自分の想像を超え、こんなすばらしい生徒たちと一年を過ごすことができると思うと、とても嬉しかったです。

これからの半年間も、まだまだ初めての経験が多く、戸惑うこともあると思います。しかし、毎日が勉強だと思って一日一日を大切に過ごしていきたいです。特に学習規律をしっかりすること、生徒が楽しくなる授業づくりをすることを目標にしていきたいです。私は、理科を担当していますが、この半年間で生徒が楽しみながらも、学習規律を守って活動する授業づくりの難しさを強く感じました。理科の実験や観察の授業は、生徒が楽しみながらできる半面、危険も多いので、学習規律を守ること、実験や観察を楽しむことのバランスをうまく保ちながら授業展開していくことを常に意識していこうと思います。

この朝日中学校で教員1年目の経験ができることに感謝して、いろんなことに挑戦し、成長できる1年にしたいです。



「我がクラスはコオロギブーム」

さみさと小学校 七澤 都



2年1組の担任となって、半年が経ちます。最近の我がクラスの子供たちは、毎日の昆虫探しに夢中です。一人の女の子が近所の公園で捕まえたコオロギを学校に持ってきたことがきっかけとなり、大休憩になると、虫籠をもって、池やグラウンド周辺に猛ダッシュ。昼休みや放課後も、同じ光景が見られます。最初は、虫籠に草を入れるだけだったのですが、日に日にコオロギやバッタに愛着をもち始め、友達と一生懸命に育てようとする姿が見られるようになりました。

ある日の話です。バッタが餌のナスを全然食べてくれないと、しょんぼりしていた女の子。お昼にバッタがナスを食べているところを発見すると、「見て見て、バッタがナスを食べてる。」と、うれしそうに虫籠を私に見せに来てくれました。また、ペットボトルのキャップに水を入れて、コオロギに飲ませようとしたら、コオロギが水の中で溺れそうになり、失敗だったと残念そうに報告しに来る子。昆虫のすみかを図鑑で調べ、10cm程度の土が必要と分かったと、直ぐにものさしを持って中庭に行き、きっちり10cmを測って土を入れてくる子。そして、その重い飼育ケースを大事そうに抱えながら帰る子。その後ろ姿がとてもかわいらしく印象的でした。

このような体験は、低学年の子供たちにとって、生き物と関わり合いながら命の尊さを知ったり、友達を思いやる気持ちを育んだりするために大切なことだと思います。これからも、自然と触れ合う経験を大切にしながら、誰もが居心地のよい温かいクラスを目指し、一生懸命に頑張っていきたいと思います。

学びつづける教師であるために ～夏休みの研修の概要・感想～

情報教育研修会（タブレットの効果的な活用）

参加者 35名

日時 8月3日（木） 場所 あさひ野小学校コンピュータ室

講師 朝日町情報教育研究調査員6名、ベネッセICTサポーター3名

内容 「授業の始めの3分でできるプレゼンでの復習」
「ミライシードを使って全員参加の話合い活動づくりと基礎学力の向上」

- ミライシードについても、即実践していけるプログラムばかりで参考になりました。子供たちに伝えて、子供たちの間で行うコミュニケーション方法の一つとして使ってもらえようようにしたいです。
- Keynoteは、授業の始めのウォーミングアップとして作る問題提示に適していると思いました。写真を使って簡単に作り、学習意欲を高めることができると感じました。
- 即実践していけるプログラムばかりで、とても参考になりました。学習に積極的に活用し、主体的・対話的で深い学びの形成を目指して工夫して使っていきたいです。
- 実際に体験したことで、日々の授業に活用できることが分かりました。子供たちの学力向上に向けて自分自身のスキルを向上させないといけないと改めて感じました。
- ・ どのようにICTを活用し、学力向上につなげていくかを真剣に考える時代にきています。教員も生徒も当然使えるようになっていくべきだと思います。中学校も教室にすべてそろっていただければいいと感じました。



第1回朝日町学校教育運営研修会

参加者 24名

日時 8月22日（火） 場所 朝日町図書館研修室

講師 北星ゴム工業（株）代表取締役社長 米屋 慎一 氏

演題 「私が会社で実践していること」

- 「仕事はやり切るもの」社長の仕事への厳しさとともに自分を変えていくという気概を強く感じました。他分野・多方面でご活躍されている方のお話だったので、言葉に重みがあり、とても参考になり、自分も元気になりました。
- 「失敗から学ぶ」よさ、強みを教えていただきました。また、社員とのコミュニケーションを大切にしておられることをお聞きし、私たちの職場にとっても大切なことであると感じました。
- 「社員ファースト」というキーワードが、そのまま「生徒ファースト」として学級経営を実践できるのではと感じました。新学期から挑戦していきます。



朝日町とやま型学力向上プログラム研修会 参加者名 38名

日時 8月1日(火) 場所 朝日町図書館研修室

講師 国立筑波大学附属中学校 教諭 岡田 幸一 先生

演題 アクティブラーニングを取り入れた文学の授業 ー読書促進を目指してー



- 自分たちで問いを見付け、自分たちで深め答えに迫る学習（アクティブラーニング）のおもしろさを知りました。
- 自分の読み（問い）が大切にされれば、子供は意欲的に読み深めていくのだということが先生の実践から分かりました。私（小学校・他教科）も取り入れていきたいです。
- 先生の「文学の本質を味わわせる深い展開」に感心しました。国語科の読み取りの授業では、授業者も十分な構えが必要であることや、子供が主体的に進めていく機会を増やしていくよさが実感できました。
- ・ 生徒が抱いた疑問を基に、全体討議へとつなげる授業には、実際には様々

な手立てが必要になると思います。その授業づくりに取り組んだ岡田先生の具体的なテクニックを教えていただけたら嬉しかったです。

授業力アップ研修会

参加者 17名

日時 8月24日(木) 場所 朝日中学校会議室

講師 朝日中学校 教諭 飯田 澄代 先生 研修名 学校カウンセリング

- SGE(構成的グループエンカウンター)やブリーフセラピーなど、「活動を共にすること、傾聴すること、自己開示すること」など体験を通して、心を開くことの気持ちよさや真剣に聞いてもらうことから生じる安心感を十分に味わうことができました。子供たちに実践できる手法を例示していただいたので、これは、2学期に即実践したいと思いました。
- ブリーフセラピーを初めて知りました。私は、同じペアの先生にカウンセリングしていただいて、新しい自分の強みに気付くことができました。今後、悩んでいる生徒の助けになれるように練習したいと思います。



- 國分康孝先生の「リレーション」に匹敵するほど、飯田先生の研修プランは、心を通わせることの大切さを実感させていただく内容でした。子供と接する時、信頼をベースにしていきたいと思います。
- 温かいエピソードを教えていただき、2学期のパワーをいただきました。カウンセリングの視点をもった支援の在り方の根幹には、やはり「愛」があるのだと感じました。

授業力アップ研修会〈理科実験〉

参加者 23名

日時 8月9日(火) 場所 あさひ野小学校理科室

講師 県総合教育センター科学情報部 寺崎清光・岩城 圭一・西谷 裕子先生

実験1「しんきろうの世界」



実験2「バーチャル火山噴火」



- バーチャル火山噴火の実験は、実際に噴出するマグマの様子を見ることができ、とても楽しかったです。材料はどれも手軽に準備できるものであり、これならやってみようと思えそうなアイデアをいただけたような気がします。普段、理科の指導は敬遠しているのですが、このような研修のおかげで、自分自身が理科の面白さを体験できるのがあります。
- 簡単なグッズで蜃気楼や火山噴火を再現することで、自然現象を具体的に実感することができました。子供たちが、実験を通して感動を味わうことから追究が始まると思うので、大変有効であると思いました。

郷土を学ぶ研修会（現地学習会）

参加者 12名

日時 8月17日(木) 場所 まいぶんKAN・不動堂遺跡・浜山玉づくり遺跡・ヒスイ化石KAN

講師 まいぶんKAN 学芸員 嶋田 典子先生 郷土教育開発研究調査員5名



- 郷土教育教材開発研究調査員の先生方が分かりやすく説明してくださり、人に伝える・教えるための研修の大切さと感じました。企画・運営してくださった先生方に感謝いたします。
- 学芸員が変わられたこともあり、新しい視点の話が聞けました。植物という視点から不動堂を見つめ直した点が興味深かったです。

今秋の必読・必見～「忙中閑あり」

秋はいろいろな行事があり、とても忙しい季節ですね。目の前のことに忙殺される毎日だとは思いますが、忙しい時だからこそ時間をみつけて、読書や映画で、心の栄養を蓄えましょう。「実りの秋」となることを願っています。

小・中学校 若手育成 10 の鉄則 100 の言葉かけ

著者 堀 裕嗣 発行



若手教員と過ごしたのエピソードから学んだ 10 の鉄則と 100 の言葉かけを整理した作品。漫画も入って楽しく読めます。教師人生 40 年。復路 20 年を歩み始めた方が若い世代から何を学び、どんな影響を受け、自分の世界観を成熟させられるか。再考するきっかけとなる一冊です。

小・中学校 転換期を生きる教師の 学びのカタチ

著者 赤坂 真二・堀 裕嗣 発行



現在の教育への危機感を共有する二人。「今後、教師の学びをどう変えるか」をテーマに、約 10 か月間にわたって繰り広げた刺激的な対話の記録。

戦後教育史最大の転換期における教師の学びの在り方について提案するこれからの教師にとって必読の一冊です。

小・中学校 「気になる子」 「苦しんでいる子」の育て方

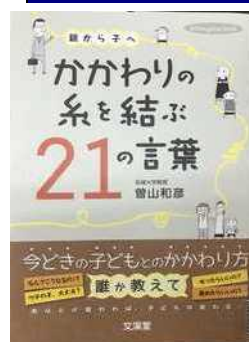
著者 金 大竜 発行 小学館



30 半ばにして「圧倒的な子供の成長の事実」を示し、全国から注目を集める金大竜先生。その先生が、発達障害・感情の起伏・いじめなど様々なことを抱えた子供に、いかに寄り添い、伸ばしていったかを淡々と綴った作品です。思わず涙が溢れるエピソードも満載！

小・中学校 関わりの糸を結ぶ 21 の言葉

著者 曾山 和彦 発行



「子供とのコミュニケーションがうまく取れない」「今の子供が何を考えているのかが理解できない」こんな悩みを抱えている先生や親御さんに必見！カウンセリング、心理学、特別支援教育の観点から、曾山先生がノウハウを伝授。「21 の言葉」を介して解決へと導きます。

教育雑誌から

『児童心理 10月号臨時増刊』は、「子供の困ったクセ」をテーマにその心理・整理解の背景の諸相や対応・支援について、いろいろな専門的立場から解説しています。指しゃぶり・爪かみチック・トルレット症・偏食・吃音等学校や家庭でよく見られる子供のクセが気になる方、悩んでいる方も多くいると思います。そこで、その原因を様々な角度から分析し、そのクセの理解と対応、心理的援助の方法まで詳しく述べられています。これからクセを軽く考えてよいのか、心理社会的治療が必要なのかを判断する力を付けるためにも、まずこの本を読んでみるとよいと思います。

編集後記

先日、久しぶりにあるメンタルトレーナーの講演を聞く機会がありました。その時、プラス思考で生活を繰り返し、成功を右脳にインプットすることの心理的効果を再認識しました。

これを基に教育を考えてみると、「やる気を引き出す」ためには、その場限りの手立てではなく、常日頃の教師の関わり等が大事だということ。つまり、教師自身がプラス思考・充実感をもっていることが重要なのだと改めて感じました。心の励み・癒しに、一冊いかがですか？

発行：朝日町教育センター

〒939-0743

富山県下新川郡朝日町道下1053-1

TEL (0765)83-0279

FAX (0765)83-0279

E-mail asahi-ec@tym.ed.jp

Webサイト <http://www.asahi-c.tym.ed.jp/>